



台風の眼の真ん中で鹿踊
秋惜しむほどの齡は過ぎにけり
帰らざる遣唐使船思ふ夜長
自画像の吾は土塊芒の穂
冬の田に滲む油膜や六林男の忌
さよならと囁いてゐる草紅葉
風神や風袋には雑きのこ
箒草みごもるやうに紅いづる
秋耕御釈迦にしたる鋤一本
黒姫山へ帰る久延毘古風のこゑ
柩とふ黄泉への舟や小鳥来る
鬼蓮のひとつひとつに鴨鎮座
新米の刺より溢れ匂ひけり
書肆ありし頃の大きな夜長星
山ねむる今生あつき一句欲し

*

円城寺 龍
住 斗南子
堤 保徳
唐澤南海子
木村安以
西澤日出樹
小熊里利
功刀たかね
辰野利彦
酒井和子
小谷一夫
沖田泰子
長島 環
松本よし乃
横地妙子

前の世に蒔きしコスモス剪りにけり
稲木解くクルスのイエス放つごと
小春日の普陀洛渡海のたりとし
コスモス忌てふ名を汝に捧ぐべし
月光や氷河を巡る旅一日
火打石松茸採りに行く夫へ
蝦夷丹生に熊の頭の見え隠れ
早池峰の牛に食べさせ葡萄滓
母の忌間近島田帯祭盛ん
神無月麴麴のぐるりはオール耳
腰痛を神にいただき秋耕す
男衆の息太くして鯉あぐる
振り向けば石榴を食ぶる母居たり
台風的眼蒼きは水の底のやう
木の悲鳴聞ゆる如く柿熟るる

柏田 浪雅
安部 克詠
新井みちを
古畑 恒雄
玉井 利之
竹野入美奈子
榎 正子
菅原砂登子
秋野美津子
丸山せんかう
河西 将
木村由里子
宮坂千恵
上脇 邦子
平山ちか子

岳俳句・拓くことば 一月

(449)

宮坂 静生

○歳時記にある季語を自分の暮しの場で検証し、記されている解説とのずれを捉えて詠うこと。

秋惜しむことが近年曖昧になっていないか

秋惜しむほどの齡は過ぎにけり 住 斗南子

古来秋は自然の月や紅葉の美しさが忽ち凋落する変化を通して、〈寂しさ〉を噛みしめる最高の季節であった。それには季節に向う人間にも多少のエネルギーがないと、季節に圧倒されてしまう。九十歳を越えた作者。わが衰齡はもう惜秋の情には耐え得ないという。佳き季節と讃えるよりも冬を間近にこの秋冷がこたえると、味気ないわが身を省みることよ。私はまだ老大ほどにはゆかないので、率直な実感句に感嘆した。

帰らざる遣唐使船思ふ夜長 堤 保徳

作者とともに五島列島の福江島柏崎の浜に立った。平安初期、唐の文化を移入し、日本の国造りを進めるために最高の知識人に乗せた遣唐使船が第二十回寛平六年・八九四年まで海を渡った。日本を離れる風待港が柏崎である。年におよそ一回ほど。一行は四艘に分乗したが、無事に入唐した者は六

割という。一回五〇〇名ほどの船団のうち二〇〇名が海の藻屑と消えた。かなしいかな。柏崎の断崖に寄せる東シナ海の波濤は無情である。海底にのいるいと屍が堆積されていても、波は知らんぷり。歴史の傷痕は感じる人が「思ふ」のみ。かなしいかな。

自画像の吾は土塊芒の穂 唐澤南海子

子規の自画像に「土塊」のものがあ。華やかな作者が晩秋の野を背景に土塊の句をものしたことに、ある感慨を抱いた。自己省察に共感する。

冬の田に滲む油膜や六林男の忌 木村 安以

鈴木六林男忌(十二月十二日)の句は珍しい。町工場街に残る冬田の見捨てられた景を捉えた写真の目の確かさ。視線を低く、見るべきものを見つめた作句姿勢が立派。

さよならと囁いてゐる草紅葉 西澤日出樹

主人公とその連合が囁いているとも取れるが、私は、主人公である作者に草紅葉が、もうこの秋も終り、さよならと囁いているとみた。草花と交信できる作者のやさしさ。

風神や風袋には雑きのこ 小熊 里利

風の神さま(風神雷神図が名高い)が抱える風袋(風をおこすもが入っている)の中に、雑きのことは。この秋は風が吹かず出番がない風の神が、茸狩に熱中した。それも「りこぼう」「あみたけ」など名もなき茸を手当り次第詰め込んだ。よほど茸好きの風の神。着想が秀逸。

箒草みごもるやうに紅いづる 功刀たかね

箒草の色付きながら膨らむさまを、「みごもるやうに」が愛情深く捉えている。秋冷至る頃、箒草のあざやかな紅はなんと美しい。女性ならではの体感からの表現。

今月の秀句

台風眼の真ん中で鹿踊 円城寺 龍

作者の居住地花巻は鹿踊のさかんな地。三メートル近いササを腰指に、締め太鼓を打ち鳴らし、念仏唄を唱えて踊る。それが台風来襲のさなか、台風眼の真ん中だという。はたと大風が止んだ時を捉えてという臨場感がすごい。東北人の粘りづよさがうかがえ、台風など吹きとばす気合が入っている。〈鹿踊角が銀河に触れて鳴る〉も同じ作者の周知の作。

秋耕御釈迦にしたる鍬一本 辰野 利彦
秋耕をしながら、長年愛用してきた鍬一本をダメにした。「御釈迦」とは不良品の意。俗な言い方がおもしろい。鍬一本に釈迦がかかわるところに意外さがある。神仏に関することばは日常語になると実にユニークな連想を呼ぶ。「御陀仏」も同じ。

黒姫山へ帰る久延毘古風のこゑ 酒井 和子

「久延毘古」(崩え彦)は案山子のこと。案山子とは海上より来臨した神で、天下のことを周知の神とか。役目が終り、案山子の魂が黒姫山へ風にのって帰る幻想を描き、秀逸句。黒姫山も神話の伝承を負う山。

柩とふ黄泉への舟や小鳥来る 小谷 一夫

柩を黄泉への舟と見た。南方から渡来した海洋民族らしい、日本人のルーツを思わせる作。折からの渡り鳥の小鳥は亡き人の従者のようだ。かなしみに耐え、魂の行方に思いを馳せている。舟ほど連想ゆたかな自在な乗物はない。

鬼蓮のひとつひとつに鴨鎮座 沖田 泰子

刺ある長い花茎を持ち、その先に鮮紫色の花を咲かせる鬼蓮。その皺ある大きな葉に鴨が乗る。鴨は蓮台のつもりなのか。「鎮座」から悟りました鴨の貌が見えるようだ。

拓くことば ②4 自句寸言(8)「白萩」

秋燕や神父薪割る瘦拓地 昭和37年

「龍膽」(第百号記念号・昭和三十八年三月号) 記念特別作品入選第一位「大日向開拓地」所載。「カソリックの教会あり。保育園も経営す」と前書がつく。「棒杭のごと百姓黙す露のミサ」も同時作。浅間山麓の大日向開拓地にコロンビア人コンラード・アラゴン神父により終戦直後に建てられたカトリック教会があった。横に聖ヨゼフ大日向保育園が開かれていた。神に仕える神父が薪を割る。珍しかった。私は少年の日から毎日薪を割った。薪炭が生活のすべてに関わった時代、大鉈で薪を割ることが夕方の仕事であった。貧しく質素な開拓地の骨格を描いた。句集『青胡桃』所収。

白萩や妻子自害の墓碑ばかり 昭和37年

「龍膽」(第百号) 所載。「満州より帰途、妻子足手まとひとなりて、自害さす」とある。大日向開拓地の墓地詠。戦前の南佐久郡大日向村が分村し戸数二一六、人員七九六人が満州へ渡った。敗戦によるソ連参戦、匪賊と化した現地人の略奪や襲撃の中で、ある者は青酸カリを

新米の刺より溢れ匂ひけり 長島 環

「刺」とは米の品質を調べるために米俵にさし込んで米を取り出す金属製の道具。収穫後の珍しい農村一景を描いている。見聞した体験を捉えただけに、単純明快な作になった。熱心この上ない作者。着眼が的確になってきた。

書肆ありし頃の大きな夜長星 松本よし乃

町の本屋がつぶれている。本屋は地域の文化センターの役割を持っている。時代はスマホ、本の注文はアマゾン。本屋に出向き本を手にとり本を購入した時代は過ぎつゝあるのか。書肆と夜長星との照応が悠長なよき時代を思わせる。夜長星が遅くまで本を読みつづける時間をもたらすような。珍しい季語を用い、ベテランの作風だ。

山ねむる今生あつき一句欲し 横地 妙子

冬に入る。一生に一句でも佳吟がほしい。冬籠に入り、視野が狭くなるときだけに願いは篤い。釧路の冬、丹頂鶴の飛来がしのばれる。

次に雪嶺集、前山集から推薦候補作を掲げる。

冬麗やなつてみたきは天灯鬼 小林 貴子
秋風になびくものなき浜通り 奥山 源丘
手のひらに受くる塗香や十三夜 関 千賀子
花薄ぼこぼこ母が沈みゆく 森 玲子

瓢吹けば石鼎のこゑ間近にす 永島理江子
あどけなき子等の瞳や稲架襖 藤本 光子
毒茸蹴つてその夜の絵空事 小林 春代
ラ・フランス未だ進化の途半ば 岩間 嘉一
色鯉に赤子の眼小 六月 小野 す美

死を詠うのは大げさなことではなく日常のこと

小春日の普陀洛渡海のたりとし 新井みちを

「普陀洛」は観音が住む浄土としてインドの南海岸に想定されたもの。わが国では、熊野灘が霊験の地として名高い。十一月の小春日和の中、普陀洛を思い描いたが、どうもはつきりしない。春の海のたりのたりの蕪村の句のように、目指す観音の浄土も自分には明快ではない。さてどうしたものか。いかにもみちをさんらしい最期の名吟。わが道をぎりぎりまで通した俳人は珍しい。掲載四句は病床で奥さんが見つけた。辞世の句に相当する。ご冥福をお祈りする。

稲木解くクルスのイエス放つこと 安部 克詠

東北の稲架を稲木という。一本の棒に稲束を掛ける。まさに人が養など纏い立つようだ。稲木を崩す形を作者は十字架の磔からイエスが解き放たれたようだと見立てたもの。かつて角川源義には〈群稲棒一揆のごとく雨に佇つ〉と、稲木を百姓一揆に立ち上った百姓のようだと見立てた句がある。イ

服毒し、あるいは刃を突き自決し、また発疹チフスで命を落とし、悲惨な撤退による犠牲者は三七四人。わずかな帰国者で戦後昭和二年一月、浅間山麓の開拓地への入植者は六五戸、一六五人。夫婦揃った家族は七戸、女世帯一三戸、男世帯一六戸、青年・孤児二〇戸という。さすがに墓地には「自害」の文字は書けない。逝去の日が同じ。そこに折から白萩がはらはらこぼれる。国策による満蒙開拓モデル分村の果てを思い、立ち去り難かった。句集『青胡桃』所収。

掌に夏蚕透きとほり就職か進学か 昭和38年

「龍膽」(第百二号・昭和三十八年九月号) 雑詠。同時作「裏山に蝨蜥が鳴き継ぐ生徒の死」の評判がよかった。他に「はつたほどに跳ねたし四六時中教師」「教へるて学に遠のく雲秋意」。小諸時代の教師詠には「教壇下り生徒と寒さをわかつ」「海へ出発菓子も水着も袋に透き」「姓転々とかはる生徒髪に樹氷咲かせ」「葡萄食ぶ少女スカートに風棲ませ」がある。

掲句は、高校三年生、進路が決まらない生徒への家庭訪問をした。蚕飼の盛んな時は学校を休み働く。手を見ながら、ことはを失った。句集『青胡桃』所収。

エスを思う作者のやさしさに共感した。

コスモス忌てふ名を汝に捧ぐべし 古畑 恒雄

忌の句は多い。名付にはきまりがないので、俳人ならば〈滝落ちて群青世界とどろけり 水原秋櫻子〉から秋櫻子の忌日を「群青忌」、『万座』という句集があるので、秋元不死男の忌日を「万座忌」とするなど、かなり自在。掲出句も、その亡き人の人柄のやさしさ、楚々たるさまから花ならばコスモスと思い、コスモス忌としたもの。いかにも作者らしいおもいやりある一句と思う。すでにコスモス忌はあったような気がするが、高名な人を特定したのではないと思われるのでよいであろう。

月光や氷河を巡る旅一日 玉井 利之

氷河と月光、この一句の設定、構想に注目した。一日、月が出た夕方まで、ノルウェーかアラスカなどの高緯度の地の氷河を廻ったもの。贅沢この上ない、豪華な旅。おいしいものの食べ歩きも旅の愉しみであるが、私の好みは氷河派。月光を上五に置いたのはあざやか、大胆である。

火打石松茸採りに行く夫へ 竹野入美奈子

神のものである山へ入り、松茸を採る。神さま崇りませんよう、いい松茸が採れますように、ご無事で、出がけに火打石を打ち、邪気を払ったという。なにごとく神頼み。山村暮しの素朴さがおもしろい。いい松茸が採れたかな？

心配なし。そこで、へんなところに気付いた。食パンなどの長方形、四角形の周りは硬い耳だという。目がないので、耳でと、落し話風なところが面白いのか。変った一句。

腰痛を神にいただき秋耕す 河西 将

いたたくものはみんな神さまから。信心深い土地柄か。こともあろうに腰痛。これも神さまからの授物と腰を叩きながら菜や大根地を耕す。おかしくてかなしい。秋耕がいい。

男衆の息太くして鯉あぐる 木村由里子

佐久の鯉上げは晩秋。水田や池が飼育の場。「男衆」の方言もやさしい。松本辺では「おとこしょ」。働き者の男衆の

今月の秀句

前の世に蒔きしコスモス剪りにけり 柏田 浪雅

コスモス好きなのであろう。コスモス (kosmos) はギリシア語。宇宙の意。調和ある世界の象徴。その反対がカオス (chaos) 混沌。前世の天地未分化の中で蒔いたコスモスが現世で美しい花をつけた。そこに宇宙を思わせる世界を提示した。混沌をぬけ出した花を剪る。コスモス愛好者は多い。知と情とのバランスがとれた最高の花への讃歌。

蝦夷丹生に熊の頭の見え隠れ 榎 正子

またぎの地、秋田では春の蝦夷丹生（セリ科の多年草）の新芽は熊の好物という。そこで人は熊のものとして採らないらしい。たつぷりと蝦夷丹生を食べた熊の肉は格別。そこを承知で出熊猟において熊をいただきますとは、なんともかなしい話である。東北や北海道では蝦夷丹生は夏の季語。「におさく」は秋田方言。

早池峰の牛に食べさせ葡萄酒 菅原砂登子

早池峰の麓、花巻の地では牛に葡萄酒のしぼり滓を食べさせ、南部牛（花巻牛）を飼育するという。地貌の暮しに踏み込んだ作として目に止めた。大迫町など葡萄酒産地が目につく。

母の忌間近島田帯祭盛ん 秋野美津子

三年に一度、十月十三日から一五日にかけて島田市大井神社の祭礼に因み、絢爛たる帯を披露する。帯祭が地貌季語。元禄八年（一六九五）以来三百年の伝統がある。ところ変れば行事もさまざま。花嫁が神前で帯を安産祈願に供えた後、晴着姿で東海道島田宿内を巡行する。掲句は亡き母が帯祭に参加し、その生まれた子が私。趣向をこらした追悼句。

神無月麵麴のぐるりはオール耳 丸山せんかう

なぜ神無月なのか。神さまが出雲へ出向き留守。神の目の

息遣いがぶんぶん。気合の入った句。作者は童話も書く才媛。

振り向けば石榴を食べる母居たり 宮坂 千恵

鬼子母神の仏教説話は周知。その一句か。「石榴を食べる母」を偶然見止めた怖しさ。実際の一景とも受けとれるが、母親像の崩壊したさまにはっとする。

台風的眼蒼きは水の底のやう 上脇 邦子

台風の眼の映像が蒼く出されたものか。「水の底のやう」とは直感による連想。海上に発生した台風への着眼が柔軟。

木の悲鳴聞ゆる如く柿熟る 平山ちか子

びっしりとなった柿の木は「ひゃあ大変！」と連日悲鳴をあげていよう。「如く」を省いても悲鳴が聞こえるようだ。次に岳集から推薦候補作を掲げる。

吊橋を音の離るる秋の暮 清水 逍徑

埋火を搔きて稽古のつねのごと 寺地 和子

残る蠅句座にはまりて動かざる 関 園子

冬銀河のち絶えゆく人と見る 小松皋左衽子

煉獄の如き日常冬隣 柿谷 有史

越後三山崇め大根太りゆく 今井 愛子

鳥たちの夜の短し業平忌 窪田 英治

秋深き吾子の散骨修しけり 吉島 節子